

美術の窓(21)

山雪特展を顧みて

大和文華館館長 吉川逸治



雪汀水禽図屏風（左隻部分）



出山釈迦図（部分）

江戸初期の京狩野の祖、山雪の特展が終って、彼の画をいろいろの角度から論じたシンポジウムなど顧みて、豪華多彩な桃山美術の最後を締めくくり、新しい江戸絵画の創作を目指した山雪の役割が浮びあがって見える感じがします。

息子狩野永納の名で刊行された「本朝画史」が彼自身の遺稿が元になったものとあれば、狩野、長谷川の諸流はもちろん、土佐派の画法も心得、溯っては明兆、如拙、周文、雪舟と室町水墨の跡を慕い、雪村まで漏さず、宋元画では顔輝、梁楷、牧谿を識り、新しい明代絵画の活発な動向にも惹かれます。彼は当然、山楽の画風の後継者として出発し、終始、狩野派の現実主義、和漢折衷主義の道を棄てず、適当に、漢学者との交友によって次元の高い絵画、理想化の筆法を志します。

そこで、自ら一種の幾何学主義とでも言う様な抽象化が画面に現れ、これが彼独特の理想主義の表現になる。よく指摘される彼の画面構成上の水平・垂直の基本線がその著しい例であるが、これのため直線的に構成が目立つ。しかし、曲線要素も構成のために決して疎略にされず、もっと繊細な線の役割となって、直線と闘いながら、画面に意志的な抵抗とか感覚的快調を奏でる。

彼の傑作である大画面の雪汀水禽図屏風は、この様な、狩野派自然主義と開う知的構成の整頓を完遂することによって成立するので、この自我の芸術意志が作品の装飾面に墮すことを避けさせる。

山雪は一つの画風を若い時から中年へ、老年へと完成してゆくのではなく、いくつかの画風を作っている様に思われる。勉強家の彼は、山楽に学んだ狩野派だけでは満足しなかったのか。

著しく対照的なのは、蘭亭曲水宴図屏風で、赤と緑の派手な色彩の対照から構成された長大な画面は、彼の四季耕作図屏風や住吉社頭・須磨明石図屏風とも大いに違う。墨絵風の儒釈人物、山水花鳥と様式を異にすることは論ずるまでもない。画家は注文主によって画題を定め、それに従って、多少、画風も変ずることもありうる。しかし、山雪の場合は、画題によって別の画風を採ることがあるし、同じ山水画でも独特な幾何学図形的な山水図と、柔らかい比較的自然趣味の山水図があり、人物でも山水でも、画法はたとえ異っても彼は完全を期して描き尽し、戯画に遊ぶというものではない。蘭亭曲水宴図は、豪華な金黄地を主調に濃淡の樹木の緑、流水、岩石の淡青濃緑、樓閣の赤朱と入り混る間に坐る詩人たちと少年たちの動

き、静止する樹木、岩石、樓閣の間に流水に臨む人物たちの動勢、この長大な画面を樹木群と人物群で巧みに旋律を与えながら構成する技術は、構成の絶妙さで驚嘆させる雪汀水禽図を実現させた技術と粋を競う。

山雪の構図は、四季耕作図でも、住吉社頭・須磨明石図でも、一方は漢画風、一方は和風であって、それぞれ画想を異にするが、この様式の異なる二つの屏風画で同じ様に熟慮された風物の処理を提示し、上に述べた蘭亭曲水宴図とも雪汀水禽図とも全く異なる絵画作品を成立させる。耕作図は、風物の遠近の配置、整頓に儒教的な勸農図の趣きが説かれ、住吉社頭の図も、桃山風俗画に見られた賑やかな雑踏ではなく、清楚な松林に囲まれた御社の雰囲気の中に宮詣りする人々の静かな姿が数えられる。遥か遠くの須磨明石から、無事平穩に幾隻も舟が海を渡ってくる様子は物語の風情である。

しかし、山雪は、濃淡と筆勢の妙を示す水墨が一番得意のところではなかったか。出山釈迦と龍虎三幅は、離れ離れの三幅を通じて、墨の濃淡と筆の勢いが通い、馬師皇図は小画ながら地上の馬師皇が雲中の龍と相互に語り合う靈妙さを大気中の墨の響きに表す。盤谷図が墨一色に、これほど多種多様

の光と陰に色彩の妙を注ぎ、しかもそれを洗い落したところ、まさに山雪が宇宙に遊ぶ精神の夢を執拗に追究した筆跡。しかし、ここではまだ彼は桃山時代の狩野流、長谷川派から発した痕跡が残っている。もっと、自由に墨で自己表現して、新しい江戸水墨を開く契機を捉えることはできなかったか。

それは、彼が室町時代の水墨、或いは顔輝の蝦蟇鉄拐図を見る機会に恵まれ、衝撃を受け、彼自身、両仙人を描き、次いで寒山拾得を描いて写実と密着した水墨濃淡を学び、同時に恐らく雪村の水墨か水墨淡彩に接して、我が意を得たりと共鳴するところ少なからざりしと想像する。人物にバックに、例えば出山釈迦図、馬師皇図などで、薄墨を掃いて雰囲気を作り、主人公を立体的に浮び出させる雪村の不断に用いし方法に力づけられしとあらざるか。

山雪は、桃山絵画の諸流を受け容れ、さらに室町絵画にも学び、自ら独特の様式をいくつか開発し、そのいずれも徹底的に自分の様式として完成させた。この点は先例を折衷して様式化して満足したのではない。この点、京狩野の師として弟子達のために、工芸図案家のため、参考となる手本を多く残した点が評価できるのではない。

季刊 美のたより No.77

昭和61年 11月 21日

発行 大和文華館